

## 〔本論〕

### I . 発掘調査に至る経過

手広遺跡は、1976年に奄美考古学会会員・里山勇廣氏によって発見された。奄美においては数少ない重層遺跡のひとつであり、龍郷町教育委員会も採砂工事を阻止するなど、積極的な保護対策を講じた。1978年には、遺跡の性格を確認するため、龍郷町教育委員会・奄美考古学会によって発掘調査が行なわれた<sup>註①</sup>。崖面を整理する程度の小規模なものであったが、6枚の遺物包含層が間層をはさんだ良好な状態で検出された。これらの包含層は面縄西洞式から兼久式土器までを含み、その変遷過程が明らかになった他、兼久式土器文化期における柱穴の検出・鉄片の確認等、数々の新事実が認められた。

このように手広遺跡は奄美の先史文化を明らかにするための重要遺跡のひとつとして注目されたが、採砂による砂丘のバランスの失墜は遺跡の存在自体を脅かすことが予想されるに至ったため、本格的調査を望む声が高まった。これを受けて、1984年、龍郷町教育委員会は熊本大学白木原和美教授に調査を依頼し、同教授が編成した熊本大学考古学研究室を中心とする調査団によって発掘が行なわれた。調査は1984年7月21日から始まり、同8月13日に終了した。

### II . 調査の実施と報告書の作成

調査を依頼された白木原教授は、調査の時期が住用村サモト遺跡における専攻学生の実習調査に引き続くため、全体としての調査が炎天下の砂丘において1ヶ月以上にわたる点を憂慮し、学外の機関にも協力を要請して調査団を編成した。団の編成については、別府大学橘昌信氏の援助があった。

現場の指揮は八代高等工業専門学校助教授兼本学講師佐藤伸二の指導の下に大学院生西谷大がこれに当たった。報告書作成のための研究活動は、甲元助教授が中心になり、考古学専攻学生全員が参加した。

編集は略報告書を研究室助手馬原和広が、本報告書を西谷大が担当し、佐藤伸二が

助言に当った。本報告書は400頁を越えることが予想され、努力を重ねたにもかかわらず、西谷の中国留学の期日までに完成を見ず、ために他誌への掲載を予定していた馬原担当の略報告を印刷に付することにした。従ってその「本論」の殆どについて、その文責は馬原にある。

貝類の同定は熊本大学薬学部濱田善利氏が指導に当り、獣骨の分類は木村幾多郎氏が担当した。貝類に関する民俗調査表の作成には笠利町歴史民俗資料館中山清美氏の援助があった。また梅光女学院大学木下尚子氏・住用村教育委員会森田勇氏も短期ながら調査に参加して学生の指導に当った。

なお、この調査は、専攻学生の実習調査ではなく、他学の者と協同した調査団方式の調査である。それにもかかわらず当研究室の「活動報告」に加えたのは、調査団に財政的な支柱が無かったからで、研究室に拠る以外にこの遺跡の意義を広布し、且つ炎天の砂丘に無償で注ぎ込まれた参加者一同の非常なまでの努力を顕彰する方法を、他に得難かった。上記以外の参加者の名を下に列記する所以である。

天理大学：4年次生、小寺 誠

京都大学：3年次生、桑原武男

九州大学：3年次生、大呑善晃

熊本大学：大学院生、明瀬慎吾

4年次生、友口恵子・藤崎伸子

3年次生、田中由美・徳永貞紹・西島良美

野尾晴一郎・村上恭通・村田京子

高田浩善

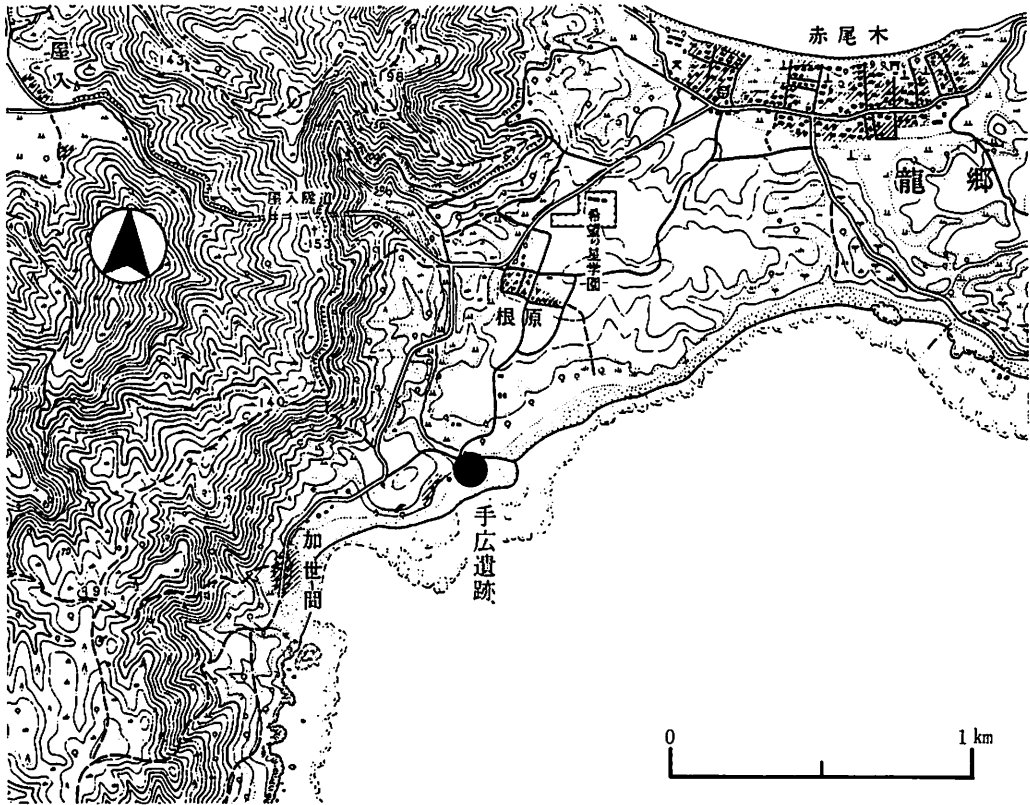
2年次生、岡美詠子・木島慎治・斉藤康子

坂井義哉・藤崎周太郎

1年次生、上田隆史・隈部敏明・横井久雄

白山修・井上靖

八代高等工業専門学校：2年次生、山崎秀喜



第1図 手広遺跡付近の地勢

### III. 遺跡の位置

手広遺跡のある龍郷町は奄美大島の北部に位置し、平家落人伝説・西郷南洲流謫の地としても知られる所である。北は東シナ海、南は太平洋に面し、西は標高300mの本茶峠を介して名瀬市に、東は幅800m程の赤尾木地峡によって笠利町に通じている。地形は一般に険しく、南北に標高300m前後の長雲山脈・標高200前後の十五山系が並行して走っている。また東北部には笠利湾がひらけている。

手広遺跡は十五山系の太平洋側、山麓から延びる標高20m程の海岸段丘の末端に形成された砂丘上に立地する。地籍は鹿児島県大島郡龍郷町字牧1730・1731及び字小泊である。遺跡に接して十五山系に源を発する手広川が太平洋に注ぎ、遺跡の北側に低湿地を形成している。遺跡の形成当時はこの湿地帯に海水が流入し、小規模な入江を形

成していた可能性が考えられる。また、付近にはウフタ遺跡・赤尾木遺跡などが点在しており、当遺跡はこれらの遺跡とともに、笠利半島東岸からつながる遺跡集中地帯の南端部を形成している。（第1図・第2図）

## IV. 調査の概要

### 1. 調査区の設定

発掘は、第一次調査区の西側、採砂並びに崩落の及んでいない約250m<sup>2</sup>について行なうこととし、第一次調査トレンチの西壁ライン延長上に基準点を置き、その延長線を軸にして5×5mの方眼状にグリッドを設定した。また、グリッドには、南から北へA・B・C・D……、西から東へ1・2・3・4……とそれぞれ名づけ、A-3区・C-7区等のように呼称することにした（第2図）。

発掘に際しては、壁面崩落の危険性を除外するため下層へ向かうに従って調査面積を縮小し、断面階段状に掘り進めていった（図版4上）。

### 2. 層序（第3図）

今回の調査では19の基本層序が確認されたが、前回調査の層序とは若干異なる点がある。

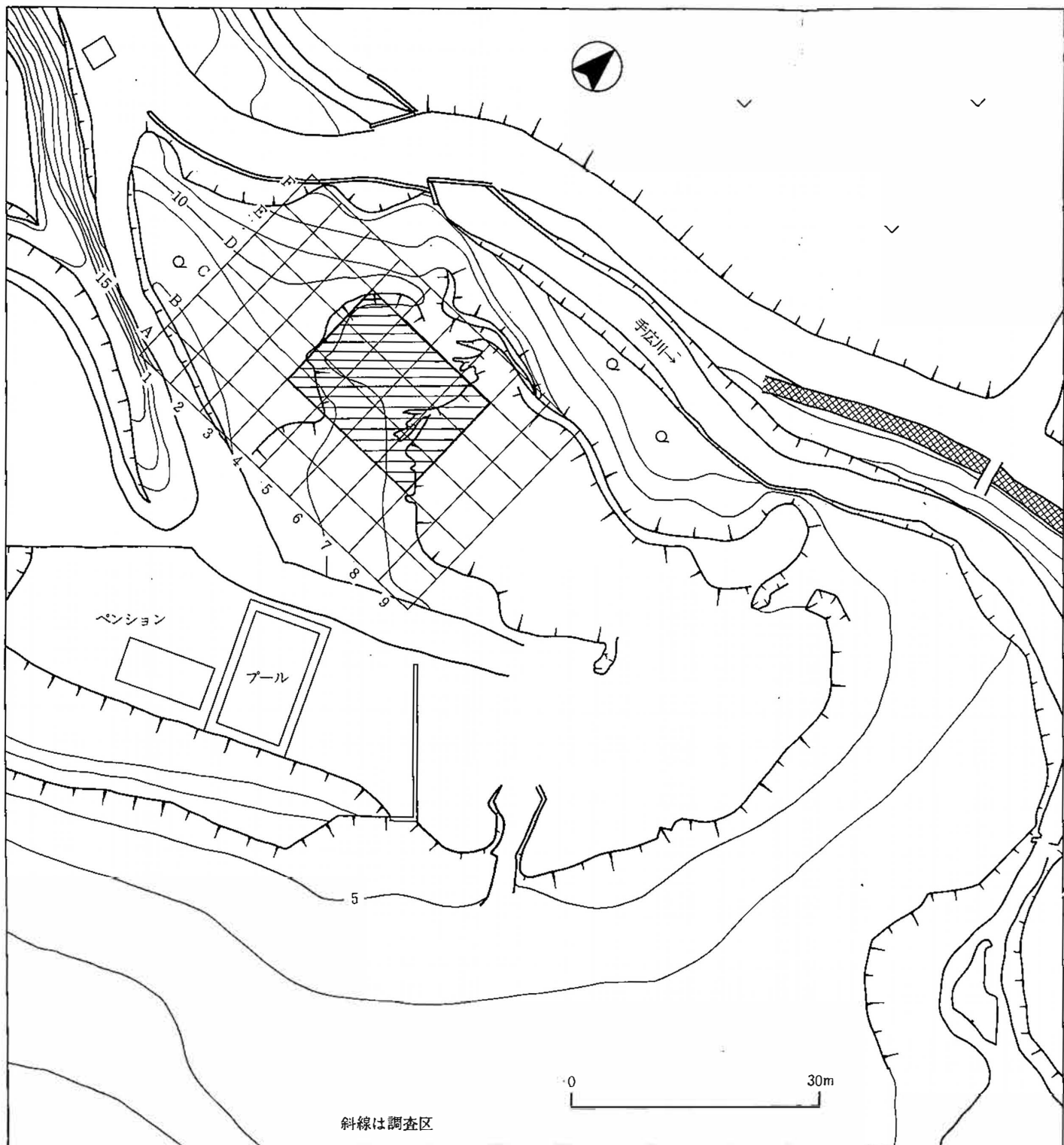
第1層：現地表であり、礫まじりの赤橙色土層で、客土と思われる。無遺物層である。

第2層：褐色砂層。部分によって細分可能であるが、ここでは一括した。無遺物層である。

第3層：黒褐色砂層。遺物包含層である。厚さは約30cm。第1次調査の第2層（第1文化層）に対応し、兼久式土器を主とする土器片・石器・貝製品・獣魚骨・貝・炭化物等を出土した。最下面からはピットを多数検出したが、この中には石を嵌めてあって柱穴と推定されるものもあった。しかし、環状にめぐるもの一例が確認された他は、これらのピット相互間には規則性は見出し難かった。

第4層：黄褐色砂層。一個体分の土器がまとまって出土している。

第5層：黄褐色の砂層で固くしまっている。遺物包含層である。厚さは約20cm。第1次調査では遺物包含層として確認されなかった層である。土器片・石器・貝製品・



第2図 手広遺跡地形実測図

獣魚骨等を出土する。

第6層：黒褐色砂層。遺物包含層である。厚さ約50cm。第1次調査の第2・第3文化層に対応する。これは、第1次調査地点付近に限ってこの層が第7層をはさんで上・下2枚に分かれていたことによる。当層からは、土器片・石器（石鏃を含む）・貝製品・獣魚骨等を出土した。また、最下面からは石組遺構が3基・焼けた石ばかりの集石遺構が検出された。なお、第6'層は1号石組遺構の覆土である。

第7層：明黄褐色砂層。無遺物層である。

第8層：明黄褐色砂層。無遺物層である。

第9層：明褐色砂層。厚さ約20cm。第1次調査の第4文化層に相当する。第8層が途中でなくなっている部分については第6層との識別が困難である。土器片・石器・貝製品・魚骨等が出土した。

第10層：黄褐色砂層。無遺物層である。

第11層：暗褐色砂層。遺物包含層である。厚さは約20cm。第1次調査の第5文化層に相当する。土器片（宇宿上層式・喜念I式を主体とする）・石器（石斧を含む）貝製品が出土した。また、最下面より炭まじりのピットが検出されている。

第12層：明黄褐色砂層。無遺物層。上からしまった砂層・小礫混りの砂層・きめの細かいわずかに礫を含む砂層の3層に細分することも可能である。

第13層：暗褐色砂層でありその下面では小礫を含む。遺物包含層である。厚さ約10cm。第1次調査の第6文化層に対応する。土器片（面縄西洞式土器を含む）・石器・貝製品等が出土した。また、最下面より、環状に並ぶ石組遺構・同一種の巻貝のみを集中して有するピット・種別にまとめられた貝溜り等を検出した。

第14層：灰褐色砂層。厚さ約20cm。今回の調査で新しく確認された遺物包含層である。しまった部分と目の粗い砂の部分とがある。礫の混入が目立ち、その下面においては、こぶし大から人頭大までの大きさのものが無秩序に堆積している。土器片（嘉徳I・II式を含む）等を出土した他、最下面から焼礫の集積した遺構が検出された。

第15層：黒褐色礫層。無遺物層である。有機物による汚染がひどく手広川の河川敷であったと思われる。

第16層：ピーチロック層。

第17層：黒褐色砂層。土器片数点が出土した。

第18層：灰褐色粘土層。無遺物層である。

第19層：青灰色粘土層。無遺物層である。

## V. 遺構

### 1. 弧状配列ピット (図版 2 上)

C-4区第3層下面より検出された。第3層からは、他に、中に石を持つもの、持たないものなど多数の柱穴と思われるピットを検出したが、規則性は見出し難く、これは弧状に配列する唯一の例である。弧状に並ぶピットは7基、いずれも直径20cm・深さ25cm程度である。そのうち石を有するものが2基ある。ピットに囲まれる部分には、深さ6～7cmの浅い掘り込みと、暗赤褐色を呈した焼土の広がりが出された。おそらく、長径約2.5m・短径約2mの楕円形プランを呈する平地住居の柱穴と思われる。

### 2. 石組遺構 (第4図, 図版 2 下・3 上)

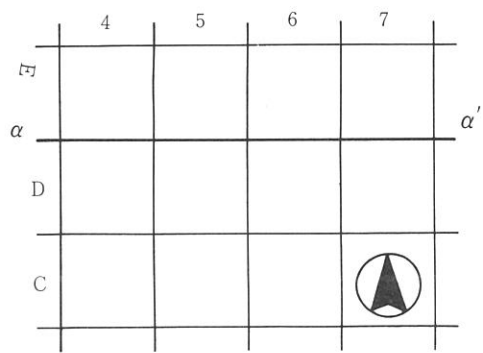
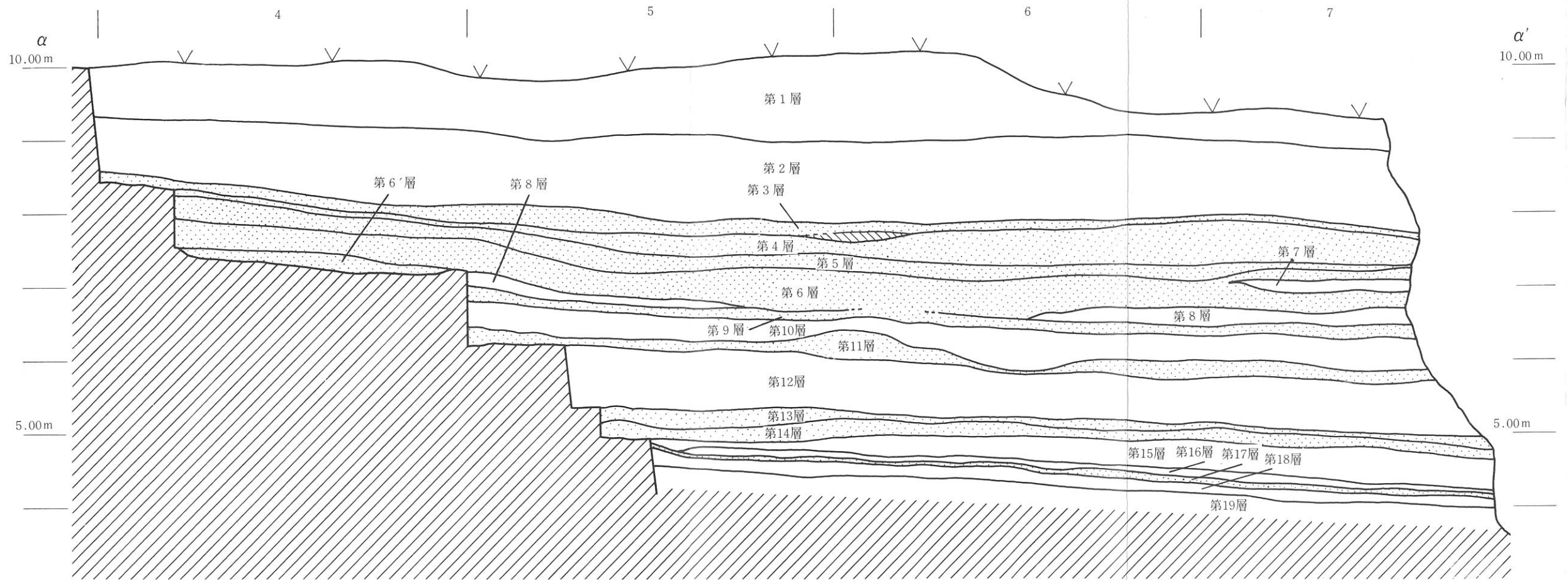
石組遺構は、第6層下面より3基(1・2・3号)第9層下面より1基(4号)検出された。

#### 1・2号遺構 (第4図, 図版 2 下)

D-4区からE-5区にわたって検出された。いずれも30cm程の掘り込みを作って、その立ち上がりの部分に10～30cm程の石を組んでおり、プランは一辺2m程の隅丸方形ではなかったかと思われる。両遺構は切り合い関係にあるが、1号遺構(外側にめぐる)は2号遺構(内側)によって切られており、1号遺構の先行が確かめられた。いずれも掘り込みの中に、炭化物・土器片等を含む黒褐色のしまった砂層が堆積していた。2号遺構は掘り込み最下面に焼土の広がりを持ち、その上に固結した灰・炭化物まじりの層がさらに堆積していた。柱穴らしきものは確認できなかったが、住居址と見てさしかえないであろう。

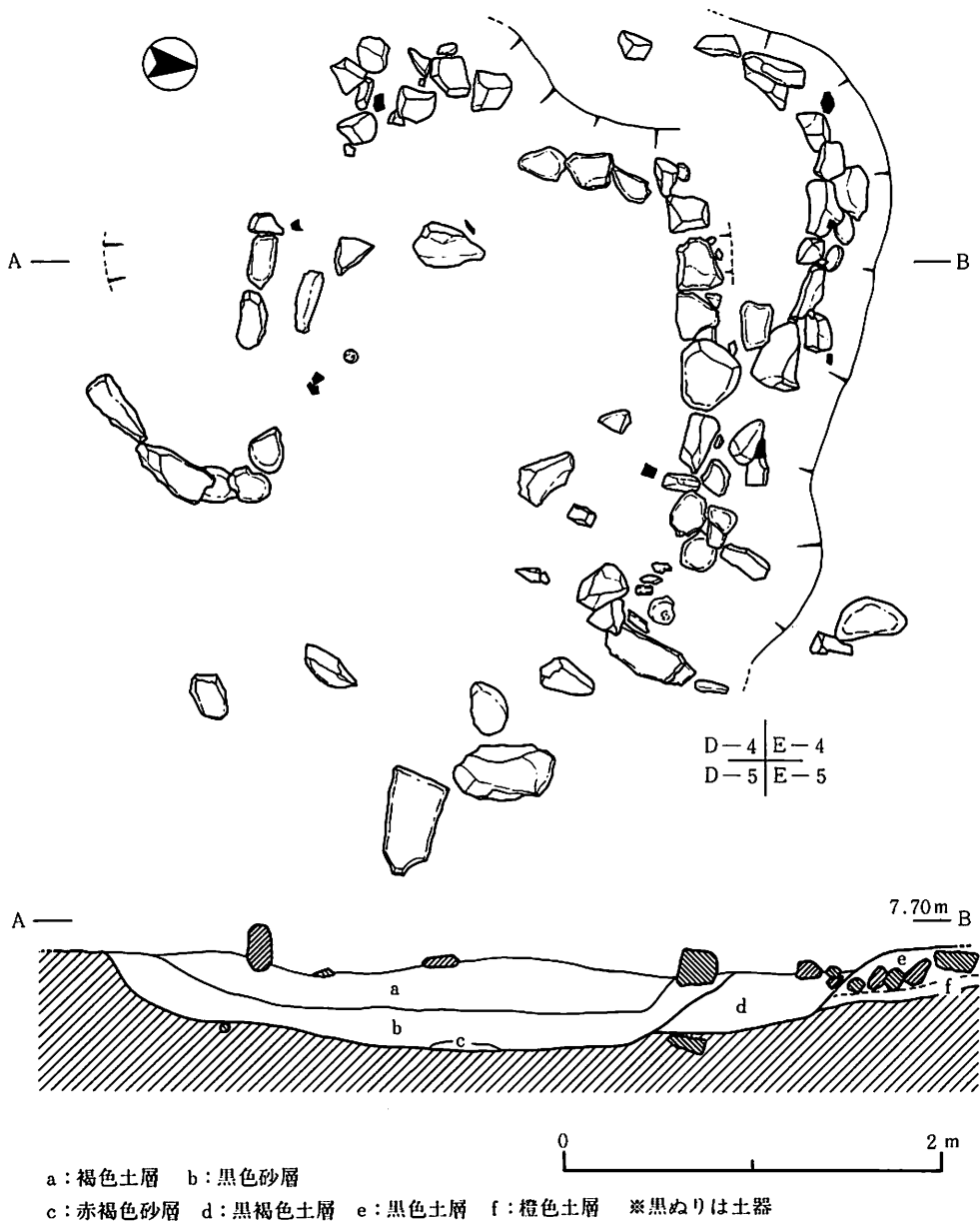
#### 3号遺構 (図版 2 下)

E-4区からE-5区にわたって検出された。E-4区からE-5区にかけては、第6層の下は黄褐色土の堆積が見られ、西から東へ傾斜しているが、この遺構はその傾斜面の上に作られている。遺構は、西から東へ長く延びる1列(長さ約4m)と、



第3圖 地層断面圖





第4図 1号・2号石組遺構

そこから北側に枝状に直角に延びる2列(長さ約1.5m)の石組とからなる。大きささまざまな石が使われており、一部黄褐色土を掘り込んで石を据えた部分が確認された。E-5区東側では、黄褐色土が砂の上ののっており、その上に石が据えられた状態であった。これがある種の整地を意味するのか、流れ込みなのか判断し難い。また、石組の範囲内には

遺物はほとんど検出されなかった。住居そのものというより、住居に関連する何らかの外部施設としてとらえた方が妥当であろう。

#### 4号遺構（図版3上）

E-5区第13層下面より検出された。推定プランは、長径約3.5m・短径約2mの楕円形である。ほぼ中心部には、炭まじりの黒褐色をした砂の広がり確認された。

#### 3. 焼礫の集積した遺構（図版3下）

火を受けた礫は少数ながら各層にわたって点在する。しかし、それらの特に集中し累積されているものが、E-7区第6層下部とD-5・D-6区第14層下部から検出された。

第6層のもの（図版3下）は5cm程の丸味を持った焼礫を主とし、長径1.5m・短径1m程のいびつな楕円状に集積されていた。その厚さは6～7cm程で、下面にも顕著な凹みはみられなかったが、遺構内には灰・炭を混えた黒褐色土が広がり、ビーチロック状に固結した部分が認められた。礫の間からは、小形二枚貝・骨片・土器片が少量検出された。

第14層のものは、直径約1.2～1.3m程の円形を呈する。皿状の焼土の上に焼礫がのった状態で検出された。焼土の厚さは5～10cmで、礫は5～15cm程のものが主であった。範囲内からは少数の土器片と貝が検出された。

これらの遺構の性格は明らかではないが、可能性の高いものとしてアースオープンなどが考えられよう。

## VI. 遺物

### 1. 土器

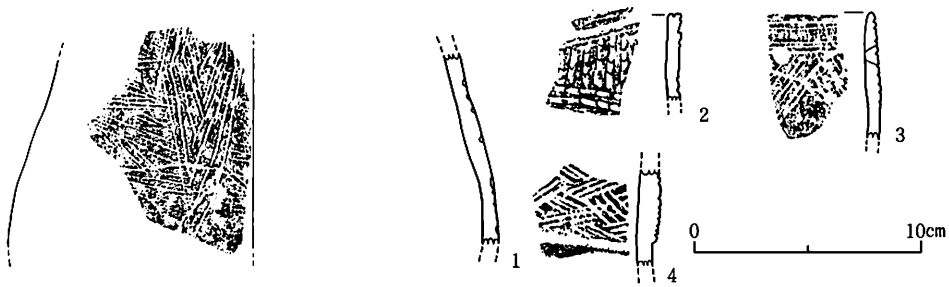
出土土器は多彩であるが、各文化層毎に成形・組成などについての特徴が見られる。ここではそれらを大まかに次のような類・種を用いて記述する。

#### ※器形

A類：深鉢・甕に類するもの

B類：鉢に類するもの

C類：浅鉢・皿に類するもの



第5図 第14層出土土器

D類：壺に類するもの

底部

※土器の質

㊶種：軟質で軽い・多孔質で吸水性に富む・雲母細片を多量に含むなどの特徴を持ち、ほとんどが黄褐色を呈する。宇宿上層式に代表される。

㊷種：堅緻で重く、砂粒・雲母片を少量含む。

暗褐色・黒褐色のものを中心とする。

㊸種：胎土の質は㊶種に近いが、より硬質で、雲母片の量が少なく、やや重みのあるもの。

黄褐色・暗褐色のものが多い。

#### 第14層出土土器（第5図）

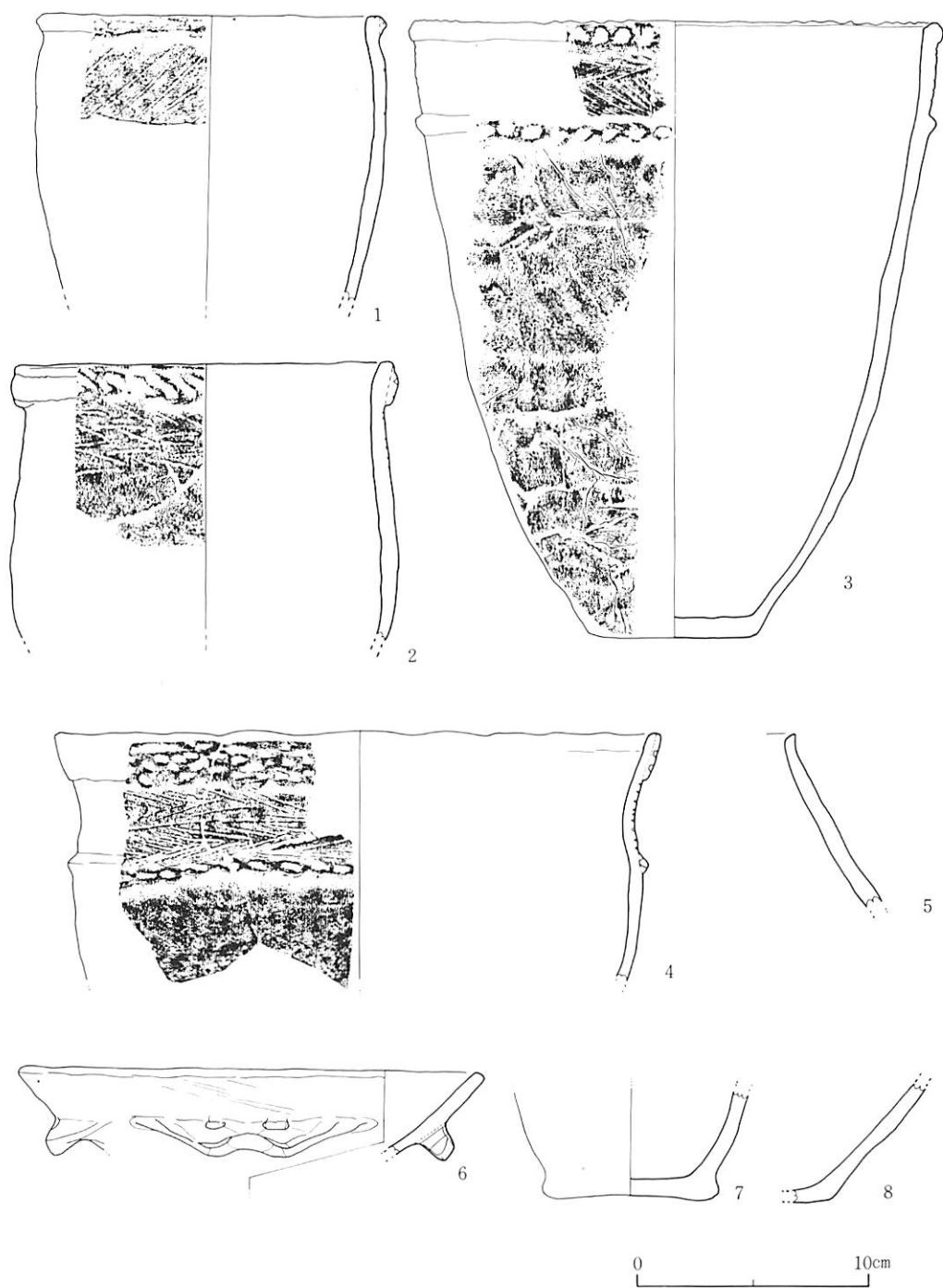
第14層の土器は、いわゆる嘉徳Ⅰ・Ⅱ式に属するが器形を復原できる資料に乏しく、図示できたものは全てA類に属する。

有文土器には押引文を基調としたもの(2)・沈線による編カゴ状の文様を施したもの(4)・鋸歯状の文様を基調としたもの(1・3)などがある。これには㊷種が多い。

一方、無文土器片には㊶種が多く、壺形かと思われるものを含む。

調整は一部に条痕の見られる他はほとんどがナデによるものである。底部は平底のみで㊶㊷㊸種いずれもみられる。

なお、第14層の下、間層をはさんだ第17層から少量の土器細片が検出されている。有文のものは二点で、一つは沈線のみ、もう一つは沈線と爪形文を組合わせたものである。いずれも㊷種である。第14層の土器に近似するが詳細は不明である。



第 6 図 第13層出土土器

### 第13層出土土器（第6図）

当層の出土土器はA・C・Dの3類と底部に類別される。

#### ○A類（1～4）

平縁の有文土器を主とし、凸帯と沈線の組合せをその特徴とする。凸帯は口縁部に上・下二条めぐらされるものと、口縁部上端に一条めぐらされるものがあり、その上に押し引き様の文様や短沈線が施される。凸帯間や凸帯下には沈線による文様が施されるが、これには羽状のもの（2・3・4）、斜線を連続するもの(1)などがある。なお、いわゆるカマボコ口縁に近いものも出土している。これらは㊶種で、ナデ調整を施したものが多。

#### ○C類（6）

当層出土のC類には、平縁で外耳を持つものがある。外耳は横に平たく二つの孔をもっている。

この土器は㊷種で内外面ともにへら磨きが施され、作りは丁寧である。

#### ○D類（5）

無頸に近い無文土器がある。口縁部はわずかに外反するが、その口径は、胴部径よりはるかに小さい。この土器は㊸種に属する。

#### ○底部（7・8）

全て平底であるが、くびれるもの(7)とそうでないもの(8)がある。これは㊶種(8)と㊷種(7)がある。

### 第11層出土土器（第7図）

第11層は当遺跡で最も多く土器を出土した。

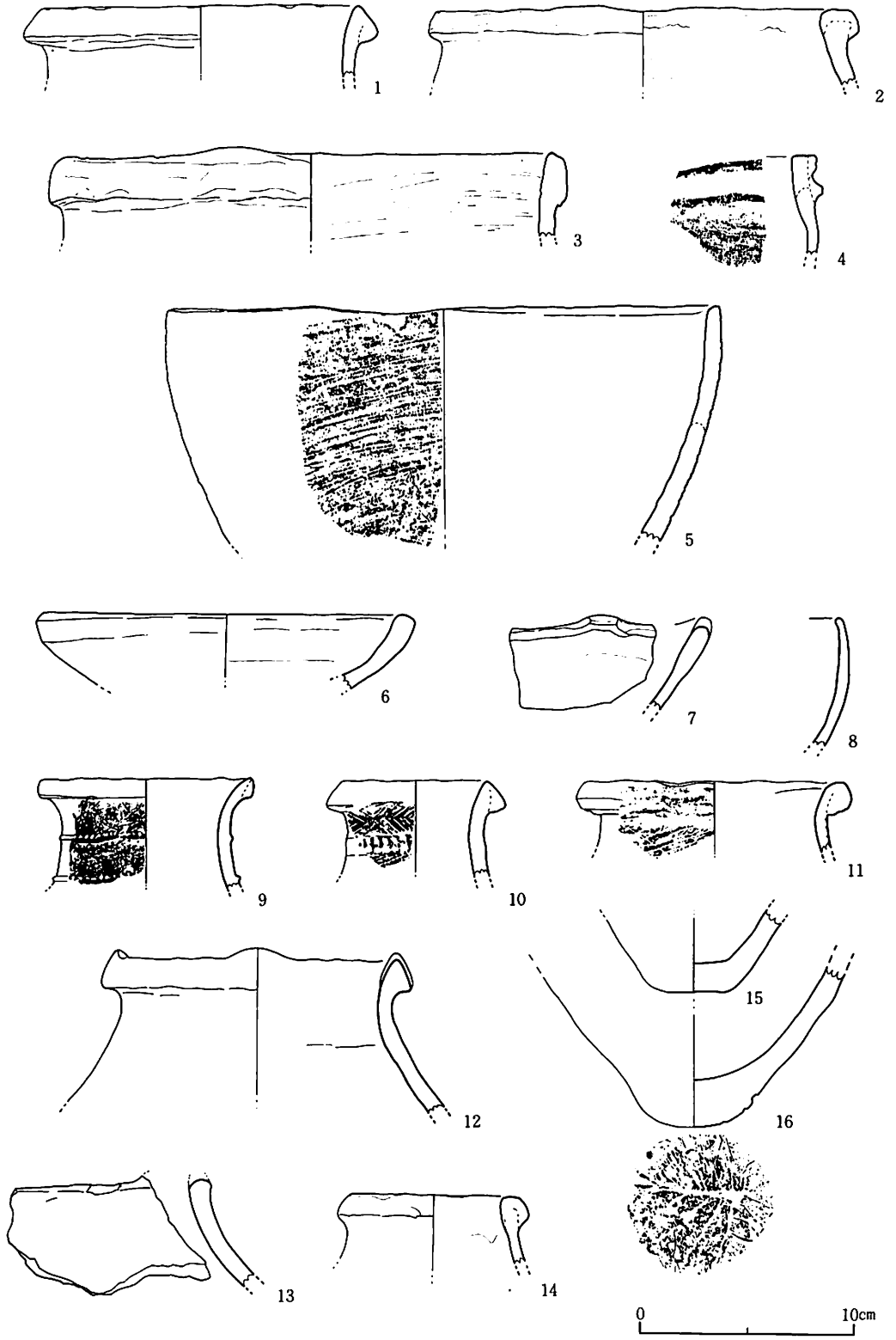
#### ○A類（1～4）

本層のA類は文様を施さないのが特徴である。口縁部二条の凸帯をめぐらしている例(2)など、少数を除いて、口縁部断面が三角形に肥厚するもの(1)とカマボコ形に肥厚するもの（2・3）に大別される。

これらには、㊶種が多く、ナデ調整が多用されている。

#### ○B類（5・8）

B類には、外器面全体に条痕を施したもの(5)がある。㊶種に属し、内器面はナデ調整である。外器面には炭化物の付着がみられる。また8は器壁が薄く㊷種に属する。



第7图 第11层出土土器

○C類（6・7）

C類には口縁部に突起を有するもの(7)とそうでないもの(6)がある。㉔種である。

○D類（9～14）

バラエティに富むが、大きく有文のものと無文のものに分けられる。

有文土器には口縁部断面が三角形に肥厚するものとカマボコ形に肥厚するものがある。文様は、刺突文凸帯と沈線のもの(10)、刺突文凸帯だけのもの(9)、沈線だけのもの(11)などに分けることができる。

無文土器は、口縁部断面が三角形に肥厚するもの(12)・カマボコ形に肥厚するもの(14)・肥厚しないもの(13)・口縁下部に段を有するものなどに分けられる。この中には、口縁部に山形突起を持つもの（12・13）がある。

無文土器には㉕種が多く、有文土器には㉖・㉗種が多い。

○底部（15・16）

尖底と平底がある。（前回の調査では丸底も出土している。）

尖底(16)は最下部に粘土を貼付し、一段盛り上がった形態をなす。平底(15)は他層のものに比べて底面積が小さい。

なお、16には木の葉の圧痕がある。15は㉕種、16は㉖種であるが、尖底・平底それぞれに㉕・㉖両種存在する。

この他に褐色の磨研土器の破片が出土している。5とともにこの層では他とかけはなれた印象をあたえる。

**第9層出土土器（第8図）**

第9層から出土した土器は少ない。ここではA類・D類・底部を図示した。

○A類（1～3）

口縁下部にわずかな肥厚部を持つもの(1)、口縁下に三日月形の外耳を貼付したもの（2・3）などがある。前者は沖縄のカヤウチバンタ式に類似する。後者のうち2は特に大形であり、内外面に炭化物の付着が著しい。この三日月形外耳の他に、ピーナツ殻状の外耳を有するものもある。また、胴が張り、しまった頸部からそのまま口縁へと続く器形のものがある。他に山形口縁のもの素口縁のものも見られる。これらには㉖・㉗種が多い。

○D類(4)

肥厚した波状口縁を有するもの(4)がある。波状部がどのように続いていくのかは不明である。㊶種に属する。

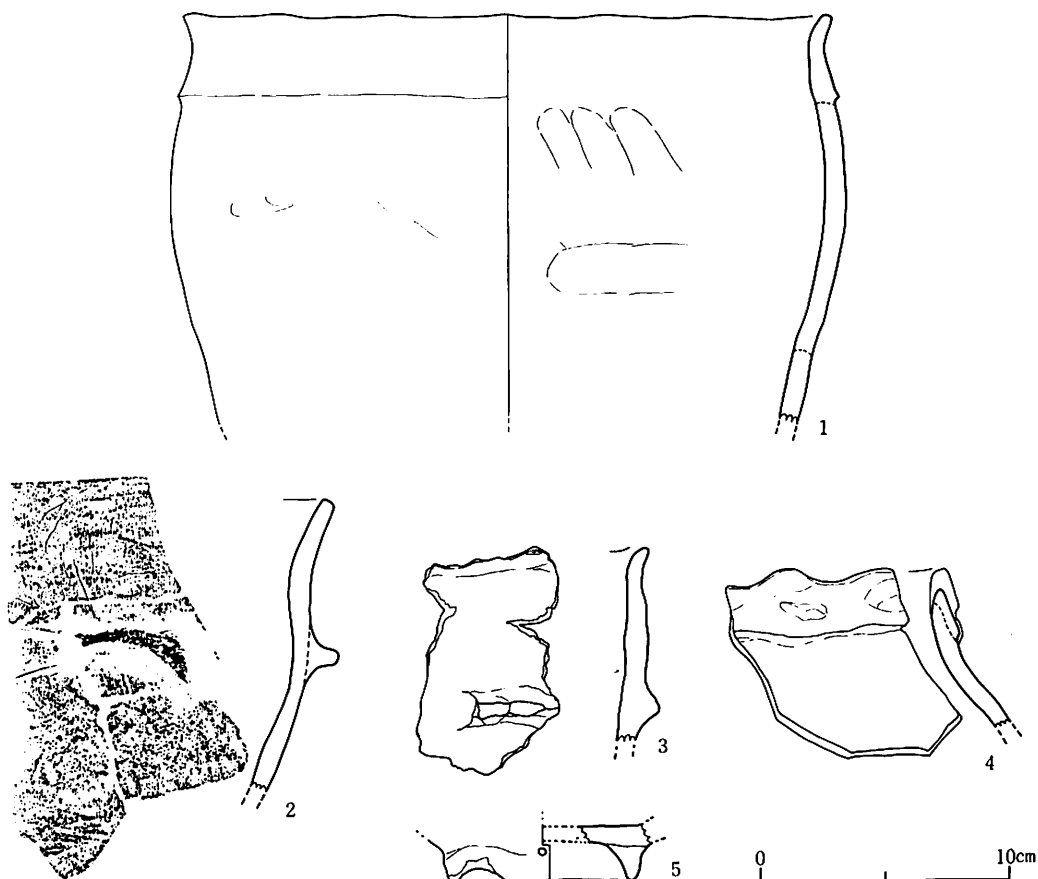
○底部(5)

台をなすものがある。脚部には穿孔がなされており、㊸種に属する。なお前回の調査ではC類や丸底の存在が確認されている。

第6層出土土器(第9図)

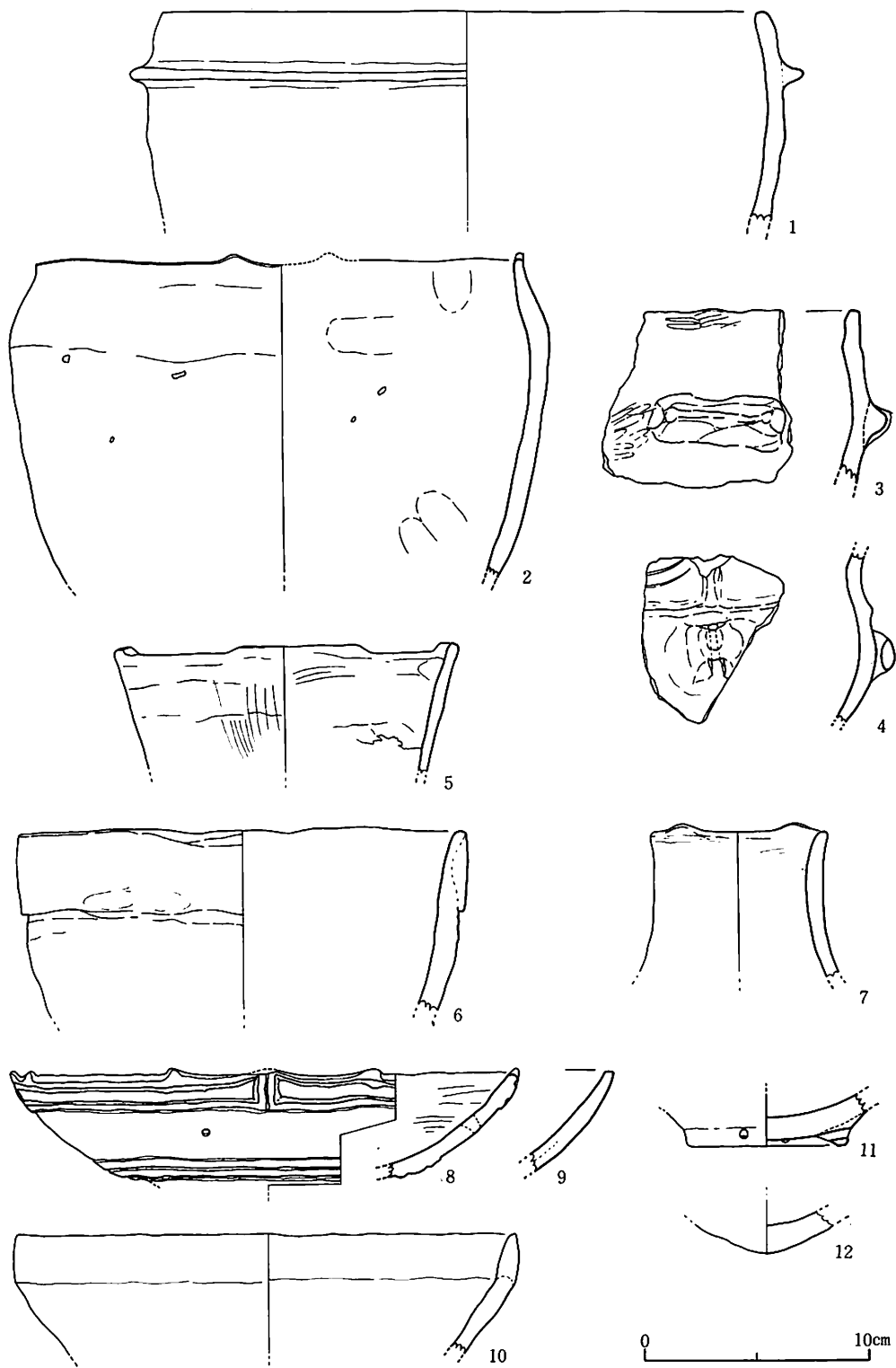
○A類(1~3・5)

第9・11層のA類と同様に裝飾性に乏しい。ほとんどが平縁と思われるが、素口縁の他に特徴的なものとして、口縁下部に凸帯を一条めぐらせたもの(1)、ピーナツツ殻



第8図 第9層出土土器





第9图 第6层出土土器

状の外耳を貼付したもの(3)、口縁に山形突起を有し、器壁の特に薄いもの(5)、口縁部をやや内傾させて屈曲部を作り、突起を有するもの(2)などがある。これらは、5が㉑種で特異な他は、㉒種のものが多い。調整はへら磨き(5)・へら削り(3)・ナデなど多様で、炭化物の付着がみられるもの(1)がある。

○B類(4・6)

平縁で口縁部を少し肥厚させたもの(6)、口縁部に凸帯を縦・横に作り出したもの(4)などがある。4には穿孔された丸形の外耳がある。これは㉒種に属する。

○C類(8～10)

有文のものとは無文のものとはある。有文のもの(8)は口縁部と胴部に沈線の施された幅広い凸帯を有する。口唇部には山形突起が、胴部には穿孔があり、軽く研磨されている。無文のものには素口縁の黒褐色の磨研土器(9)と口縁部に屈曲部を作り出した黄橙色の磨研土器(10)などがある。これは㉓種に属するものが多い。

○D類(7)

比較的長い頸部をもった磨研土器がある。口縁部には山形突起を有し、研磨は外器面全体になされ、口縁部内部にまで及ぶ。㉓種に属する。

○底部(11・12)

台をなすもの(11)と尖底(12)がある。(前回の調査では丸底・平底も出土している。)11の台部には二ヶ所に穿孔が認められる。この孔は11がD類であることを示唆している。

11は㉑種、12は㉓種であるが、台付のものはほとんどが㉑種に属する。

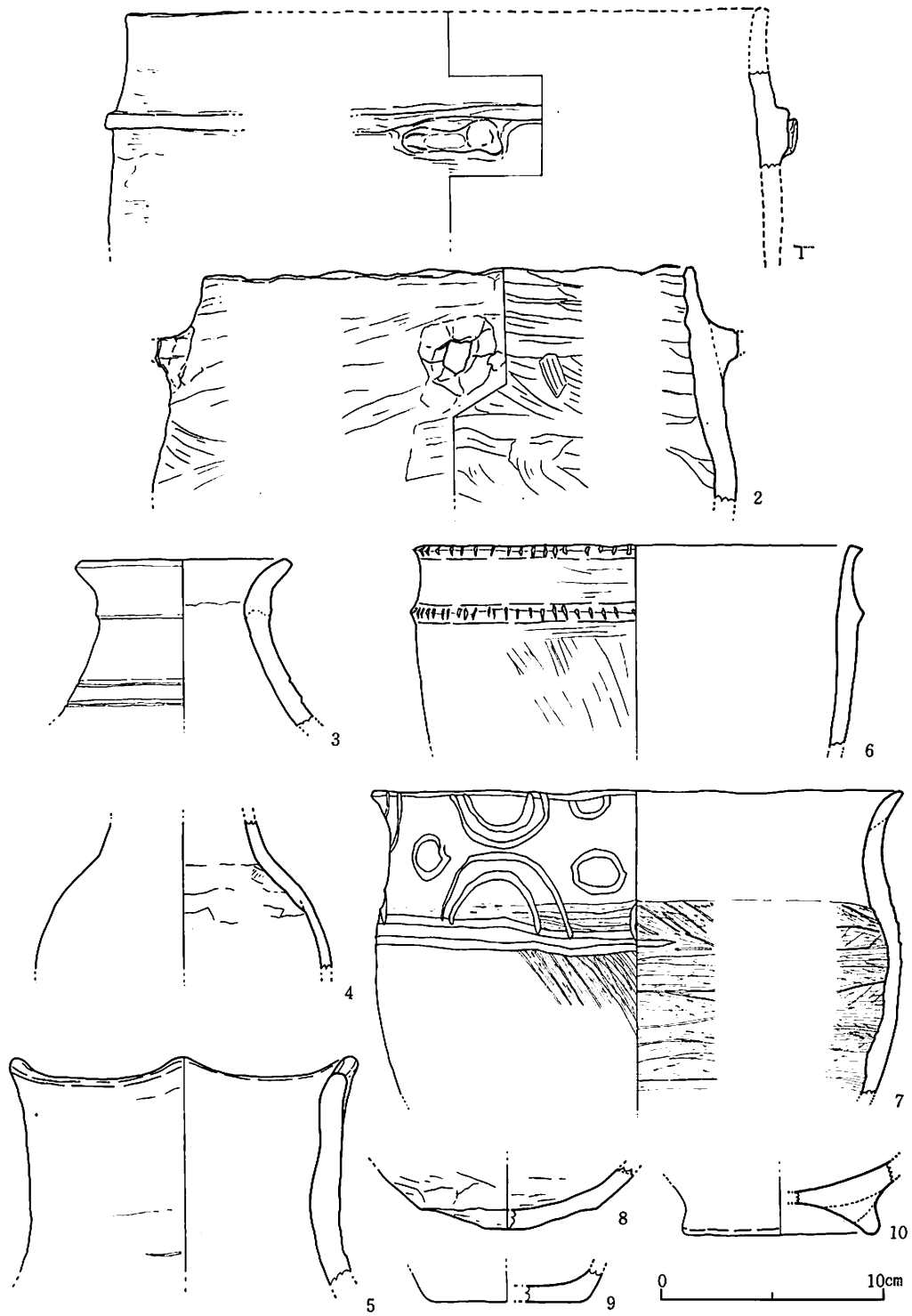
### 第5層出土土器(第10図)

○A類(1・2・6・7)

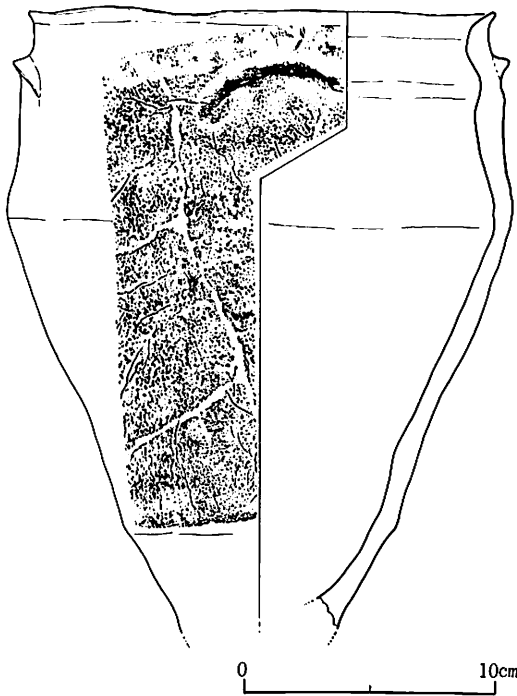
多種多様であり、口縁下部に凸帯をめぐらせたもの・その凸帯下にリボン風の外耳をつけたもの(1)・つまみ様の外耳をつけたもの(2)などの他、口縁部から頸部にかけて平行沈線文・円文・半弧文を描いたもの(7)・口縁部上下端に刻み目の入った凸帯をめぐらすもの(6)などがある。6は九州の刻目凸帯文土器に類似する。

これには、㉒種が多く、調整は、ナデ・へら削り(2)・へら磨き(6)・条痕を残すもの(7)など多様である。一般に作りはあらく、粘土の接合痕の残る例が多い。

○B・C類



第10图 第5层出土土器



第11図 第4層出土土器

無文のものがあるが、小片が多くB類・C類の区別は困難である。㊸種が大半である。

○D類（3～5）

比較的長い頸部から外反する口縁部へと続く器形の丹塗磨研土器(3)・口縁部に山形突起を有するもの(5)・胴部が球状に張り、頸部が比較的短くなると思われるもの(4)などがある。山形突起を有するものには口縁の上面形が方形になるものがある。3は口縁に段を、頸部に一条の凸帯を有するが、いずれも削り出しによるものと思われる。丹の塗布は外器面全体と口縁部内部に行

なわれている。この土器は外見上の特徴が九州における弥生時代前期の土器（板付式）に以ており、当層では前記の6とともに注目される。これらには㊸種が多い。

○底部（8～10）

台付のもの(10)・平底(9)・尖底(8)の3種がある。この中で台付のものはD類に伴うと思われる。10は㊸種、9は㊹種、8は㊺種に属するが、台付のものはむしろ㊺種が主流である。

また、第3層と第5層の間層（第4層）下部からほぼ一個体分の土器がまとまって出土している。（第11図）

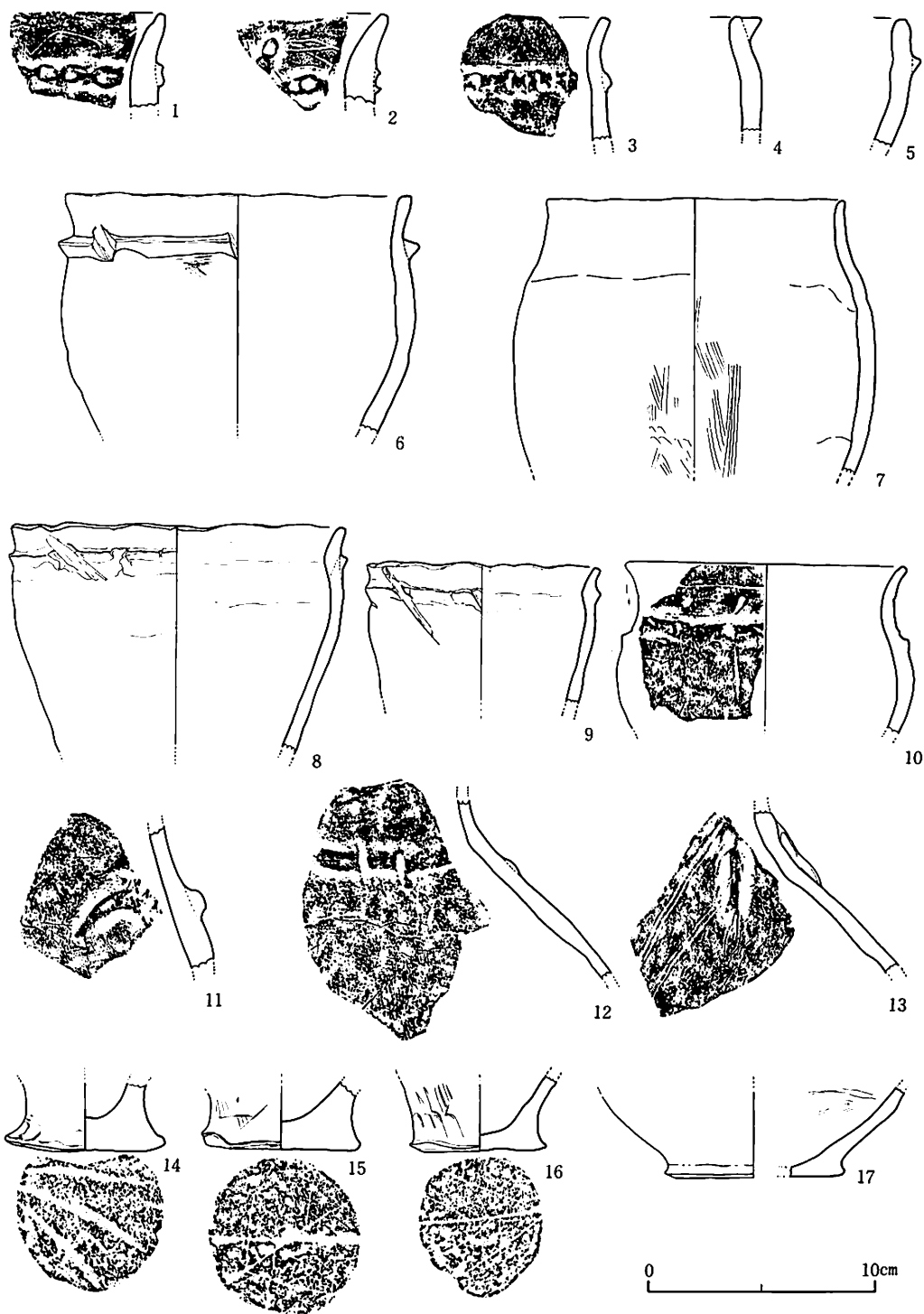
底部を一部欠失しているがおそらく尖底であったと思われる。口縁下には三日月形外耳を月し、口縁部から胴部にかけては炭化物の付着が著しい。㊹種に属する。

第3層出土土器（第12図）

当層の出土土器は、A・B・D類・底部に類別し得た。

○A類（1～4、6～9）

ほとんどが平縁であると思われるが、口縁下部に凸帯を持つものと持たないものに



第12図 第3層出土土器

分けられる。凸帯を持つものには、凸帯上にあらい刻み目を間隔をとって施すもの(6・8・9)、反対に密に刻み目を施すもの(3)、凸帯上に押し引き風の点文を、その上側、即ち口縁上部に浅い沈線を施すもの(1・2)、凸帯を口縁部上端に貼付し、口縁端をフラットにしたもの(4)などがある。凸帯を持たないものには、口縁部に若干の屈曲を有するもの(7)がある。

これらは㊦種のものが多く、すすや炭化物の付着したものがある。

#### ○B類(5・10)

口縁下部に凸帯を一条めぐらせただけのもの(5)・口縁部にあらい刻み目の入った凸帯をめぐらし、沈線を施すもの(10)などがあり、また炭化物の付着が見られるもの(10)がある。㊦種が主である。

#### ○D類(11~13)

胴部の最大径に対して口径が著しく小さいものが多い。`この中には頸部の凸帯にあらい刻み目を入れたもの(12)、凸帯と沈線を組み合わせたもの(13)、三日月形の外耳を貼付したもの(11)などがある。㊤種と㊦種が多い。

#### ○底部(14~17)

すべていわゆる「くびれ平底」である。(前回の調査では台付土器も出土している。)これらはほとんどが底面に木の葉圧痕を持っている。14~16はいずれも㊦種、17は㊦種で㊦種が卓越する。

以上、出土土器について述べたが、これらの一部は従来唱えられている嘉徳I A式(第5図2)・嘉徳I B式(第5図3)・嘉徳II式(第5図4)・西繩西洞式(第6図3等)・宇宿上層式(第7図1~3・12・14等)・喜念I式(第7図9・10等)・兼久式(第12図)などの諸型式に該当する。

## 2. 土製品

### 有孔土製円版(第13図)

第6層より出土した明黄褐色を呈する直径7cm強・厚さ約1cmの円版である。中央部には高さ1cm程のつまみ状突起があり、裏面へ貫通する穴が穿たれ、表(つまみ側)には喰い違いや行き詰りのある同心円文を、裏には蕨手風渦巻文を組合わせた文様が刻

まれている。文様は両面とも器面を四分割して描かれている。

特に渦巻文などは隼人楯やトカラ列島のボゼの文様を連想させるという者もある。また行き詰り同心円文については、未開族の間に多い僻邪の迷路文との共通性を指摘する者もある。形状は紡錘車註②に近いが、その使用目的は今のところ不明である。

#### 土版（図版4下）

粘土塊をただ平たく引き延ばした様な用途不明の土製品である。片面に大きな木の葉の圧痕、その裏面に指頭圧痕を残すものが多い。

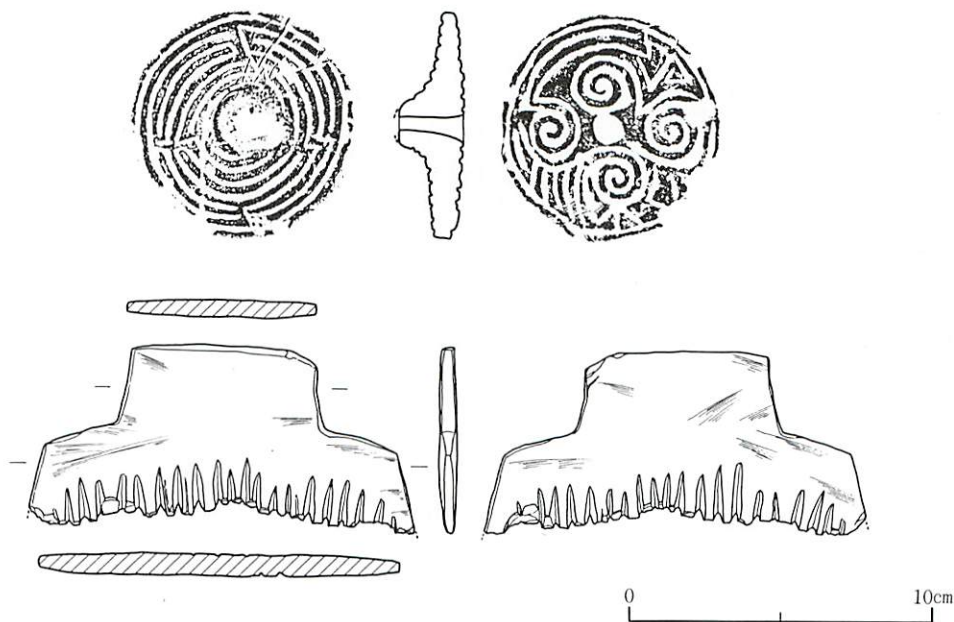
第5層から第11層まで多く出土している。ほとんどが破碎されて出土しているが、復原形は直径30cm程の円版状のものと思われる。

### 3. 石器

石器は各文化層より検出され、器種は比較的多岐にわたっている。

#### 石鏃（第14図1～3）

石鏃は第6層より3点出土した。いずれも打製。黒曜石製のものが2点（1・3）



第13図 有孔土製円版・楕形石製品

石英質のものが1点(2)である。1点は基部を欠失するが、完形の2点は基部に抉りがある。

### 石斧 (第14図)

第11層より1点出土した。両刃であるが身に強い反りがある。研磨は刃部周辺、側面に強く、その他の部分には打彫痕が残されたままである。刃端には使用痕がみられる。

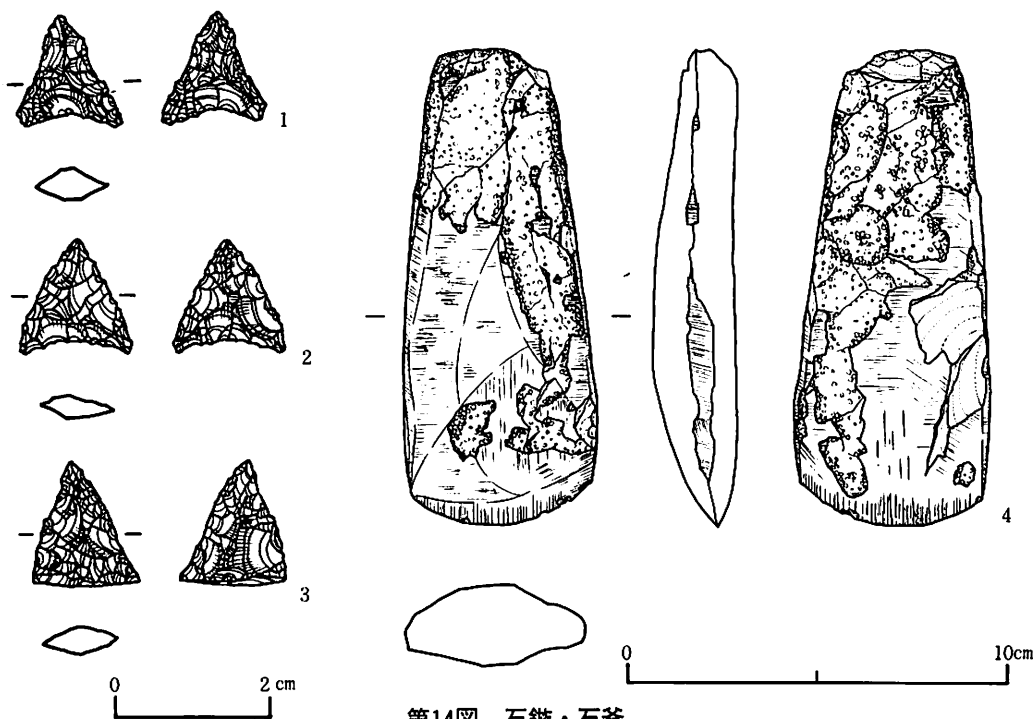
### 磨石・凹石・敲石 (図版5上 1・3～5)

これらはいずれも10～15cm程の円形や楕円形の礫をそのままか、一部整形して利用しているもので、30点ある。まんべんなく出土したが特に第6・第11層に多い。

磨石・凹石・敲石は互いの用途への転用・兼用が多く、明確な分類は困難であるが、中でも敲き痕を残すものが22点と最も多い。

ほぼ中央部に凹みを持つものは、11点あるが、いずれも敲きによって浅い凹みが形成されたもので凹みを意図して作られたものではない。

また、磨面の判別は困難であるが、磨石として用いられたと思われるものは10点程ある。



第14図 石鏃・石斧



## 石皿（図版5下）

磨られた面を持つ盤状の石製品の破片は第6層を中心に12点出土している。中には30×40cm程の大形品もある。いわゆる石皿であるが、比較的軟質の石材を利用したものが多。

## クガニ石（図版5上 2）

クガニ石<sup>注③</sup>は、第6層1号石組内より1点、第13層より2点表採で1点出土している。いずれも、比較的大形の卵形礫に調整を加えたものであるが、本遺跡の場合、敲打の後に全体にわたって敲打痕を消すような研磨がなされているものがある。

## 有溝石器（図版6上）

これは第13層より出土した。明黄褐色の平たい軟質の石材に複数の溝が交錯して走っている。溝の幅は約4mm。玉砥石の類で、貝器の研磨に用いられたとされている<sup>注④</sup>。

## 櫛形石製品（第13図）

粘板岩を用い、平面形は「櫛」形を呈した全面磨製の品である。第6層より出土した。片方には「歯」が約20本、一種の擦り切り技法で作られている。「歯」は全て磨耗痕を残して欠失しており、原状は推測し難い。使用目的等についても、関係者の間では繊維に関係するものか、とするものが多い。

この石製品や前述の土製円版はいずれもこの地方では初見のものであるが、両者とも第6層より出土している点が気にかかる。

この他にも、使用痕ないし加工痕をとどめてはいるが特定の名称を与え難い遺物が出土している。中でも粘板岩を薄く剝離しただけのもの（図版6下）は各層より比較的多く出土した。これらの剝片はその鋭い縁辺部をスクレイパーのようにして使用さと思われる。

## 4. 骨・貝製品

貝製品は、貝刃・貝匙を主とするが、他に貝輪・貝玉といった装身具も若干みられる。

### 貝刃・貝匙（図版7・9上）

いわゆる貝刃（図版9上）は、ヤコウガイの蓋の縁辺部を打ちかいて刃器にしたとされているもので、貝匙（図版7）はヤコウガイの外殻を利用したものである。いず

れも20点以上にのぼるが、貝刃は第3・第6・第11層で、貝匙は第3・第5・第6層に多くみられる。

#### 貝輪（図版8）

貝輪は大形の巻貝を使用したと思われるので第6層・第11層・第14層よりそれぞれ1点ずつ出土した。

第6層のもの（図版8右）は半分を欠失する。内面の一部を残し、きれいに研磨してある。第11層のもの（図版8中）も、一部を欠失するが、別の端はきちんと整形され、穿孔してある。同様のものを環状につなぎ合わせて使用したものであろうか。第14層のもの（図版8左）には2ヶ所に穿孔があり、外縁に切目が入る。外観から一応貝輪として取り扱った。

#### 有孔貝製品（図版9下）

第6層と第13層から1点ずつ出土した。

第6層のものは小形のイモガイを横切りにし、殻頂部に穿孔したものであり、第13層のものは小形のイモガイの殻頂部にそのまま穴をあけたものである。いずれも全体に研磨が加えられている。

#### 骨製針（図版9下）

第6層から出土したもので全面になめらかな調整が加えられている。現存長11cm。基部の断面は長方形を呈するが先端部では楕円形を呈する。基部付近には直径4mm程の孔があり、そこから欠損しているが、針とすれば糸通しの穴であろう。

材質は獣骨であると思われるが、エイの棘の可能性もある。

付近住民に印象を尋ねると魚網針とする意見、籠細工の際の目貫き針とする意見に賛成者が多かった。

## VII. おわりに

### 土器について

各層ごとの土器の様態をキーワードでまとめると以下のようなだろう。

第14層——いわゆる嘉徳I・II式を含む。

第13層——いわゆる面縄西洞式を含む。

C類・D類土器（第14層から当層にかけて）・外耳土器の出現。研磨技法。  
平底卓越。

第11層——いわゆる宇宿上層式・喜念I式を含む。条痕文土器・磨研土器の存在。D類  
土器の隆盛。尖底の出現。

第9層——カヤウチバンタ式類似土器の存在。台付土器の存在。外耳盛行。

第6層——磨研壺の出現。外耳・山形突起盛行。

第5層——刻目凸帯付土器・板付式類似丹塗磨研壺の存在。外耳・山形突起・台付土器  
の盛行。

第3層——いわゆる兼久式土器を含む。くびれ平底の盛行。

これらの諸事象は奄美の土器文化の変遷を促える上で重要な指標になる。特に第14  
層・第11層・第5層の持つ意義は大きい。

第14層から出土した嘉徳I・II式は縄文時代後期後半に比定されるものである。また  
宇宿上層式・喜念I式は、<sup>註⑤</sup>タチバナ遺跡で九州の黒川式との共伴が確認されており、  
これによって第11層は縄文時代晩期前半に相当するものと思われる。磨研土器・条痕  
鉢形土器の出土もこれに見合うものであろう。また第5層の土器は九州の土器との類  
縁性が強く感じられる。刻目凸帯付土器・板付式類似丹塗磨研壺の存在は弥生時代前  
期の様相に通じるものがある。これらのことから、爾余の層もその属する時期を極め  
て限られた範囲で補捉することができよう。（時代の変遷については巻末に<sup>14</sup>C測定結果  
を掲げてある。是非参照され度い。）

またこの他にも土器そのものについてもいくつかの新知見を得ることができた。

一つは壺形土器の出現に関するものである。奄美において壺形土器は喜念I式以降  
に現われるとされているが、それ以前に属する第13層で無文のものが、第14層で同じ  
く無文で壺形かと思われるものが確認されたことは意義深い。最近、住用村サモト遺  
<sup>註⑥</sup>跡でも面縄西洞式を主体とするIII層からこのタイプのものが出土していることは注  
目される。沖縄で荻堂式期には無文壺形土器が<sup>註⑦</sup>存在することから、それらとの関係も  
考慮しなくてはならないであろう。しかしまだ資料が充足されたとはいえず不明な点  
が多い。系統・出現の背景などの解明は今後の課題である。

二つめは外耳土器の出現に関するものである。外耳土器の当遺跡における初現は第

13層であるが、これは奄美においては最も時代の遡る資料であろう。上位の層においてA類に粗雑な実用感に乏しい外耳を貼付する傾向が強いことを考えると、皿形土器に丁寧な作りの実用感ある大形の外耳を貼付した点は注目される。

三つめは尖底土器の木の葉圧痕に関するものである。これは第11層から出土したものであるが、従来奄美において木の葉圧痕は平底の兼久式に多く見られ、製作時に敷物として使われた時に残ったものとされている。もし、この尖底の圧痕が同様に製作時のものであるとすれば製作技術を考える際に有効な資料となろう。

### 遺構について

第6層より検出された1・2号石組遺構は住居址と思われるが、この様な形態を持つものとしては奄美では最も新しい時期に属する例と思われる。

また第3層から検出された平地住居址と思われる遺構は、兼久式期における初の検出例である。

沖縄諸島において平地住居が定着するのは貝塚時代後期からである。それもナガラ原西貝塚やアカジャンガー貝塚のように初期には見られないことから考えると、奄美における住居の変遷は、沖縄諸島と軌を一にする可能性があると言えよう。

註 ① 龍郷町教育委員会・奄美考古学会『手広遺跡』1984年2月

② 中間研志 「紡錘車の研究」『石崎曲り田遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会 1985年  
この中では縄文時代後期から弥生時代にかけての同様の土製品を紡錘車として促えている。

③ 白木原和美 「クガニイシ」熊本大学法文論叢第41号1978年

④ 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡』1985

⑤ 熊本大学考古学研究室『タチバナ遺跡』1979年『タチバナ遺跡(2)』1980年

⑥ 熊本大学考古学研究室『サモト遺跡(2)』1984年

⑦ 知念勇「伊波式・萩堂式土器」『縄文文化の研究6 続縄文文・南島文化』雄山閣1982年など

## 〔付説〕

### I. 動物遺存体 (木村幾多郎)

本遺跡より発掘された動物遺存体(貝類・魚骨を除く)遺存骨の殆どは、ウミガメ腹甲・背甲板破片で、他にリュウキウイノシシが検出されているのみである。第3層から第14層の各層より遺存骨が検出されているが、第5層が全ての点で他の層をうわまわり、ウミガメ遺存骨の殆どは本層よりの出土である。

#### 1. イノシシ(表1・2)

イノシシ遺存骨で部位の同定されたものは表1に示す。各部位遺存数よりする推定最小個体数は、歯牙よりすると第3層2体、第5層5体、第6層1体、第11層1体の合計9頭分の遺存骨、四肢骨よりすると第3層1体、第5層3体、第6層2体、第11層1頭の合計7頭分の遺存骨が検出されている。イノシシ遺存骨の各計測値は、成獣でも小型であり、リュウキウイノシシと推定される。

#### 第3層

2頭分下顎骨が検出されている。現在接合不可能な部分が存在するが、おそらくは完形になるものと思われる。個体aは、左右とも犬歯歯槽部で破損しているが、右側犬歯は残存しており、雄獣である。咬耗はM<sub>1</sub>は歯頭部付近まで、M<sub>2</sub>は象牙質が大きく点状に露出し、M<sub>3</sub>は象牙質が各咬頭部が小さく点状に露出する。成獣であるが、P<sub>2</sub>-M<sub>3</sub>歯列長7.8cmと小さい。個体bはM<sub>3</sub>が半分以上骨体内に埋没している。M<sub>1</sub>は象牙質が広く露出し、M<sub>2</sub>は各咬頭部のエナメル質が磨滅している。歯牙咬耗、萌出よりすれば生後1年以内の個体である。

四肢骨では、橈骨(r.)の骨体部片が確認されているにとどまる。

#### 第5層

5頭分の下顎骨が確認された。個体cは、乳歯の残る個体で、M<sub>1</sub>が萌出しており、すでにエナメル質に咬耗が認められる。生後6ヶ月程の幼獣である。個体dは左右下顎骨が遺存する。犬歯よりすれば雌獣である。左右ともP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の間で割れ、下顎骨下縁を欠失する。M<sub>3</sub>は骨体内にその一部が残る。M<sub>1</sub>の各咬頭が広く象牙質露出、M<sub>2</sub>の各

咬頭に点状に象牙質が露出、 $M_3$ に磨耗は認められない。個体 e は右側下顎骨で下顎連合部より残存するが、残存歯槽は $P_3-M_3$ である。 $P_4$ の歯槽は閉鎖し、 $M_2 \cdot M_2$ の咬耗は歯頸部に及び、老獣である。個体 f は左右の $P_4-M_3$ の骨体部分が残存する。 $M_3$ は骨体内に完全に埋没し、 $M_1$ はエナメル質に若干磨耗が認められる。個体 g は左側の $M_2 \cdot M_3$ の植立する下顎骨で、 $M_3$ は半分以上骨体内に埋没する。 $M_2$ は部分的に象牙質が露出するが、 $M_3$ に咬耗は認められない。

以上より、乳歯を残す個体 1、 $M_3$ が未萌出または萌出中の個体 3、咬耗が歯頸部まで及ぶ個体 1 の計 5 体分の下顎骨が確認されているが、上顎骨は、未確認である。

四肢骨の検出部位は表 1 の通りで、推定最小個体数は 3 体となる。四肢骨で計測可能なものは少いが、いずれも小さい。

### 第 6 層

歯牙の植立した下顎骨は、個体 h のみであるが、おそらく同一個体に属すると思われる遊離歯（切歯）が検出されている。 $C \cdot P_2 \cdot P_3$ が残存植立するが、 $P_3$ に咬耗が認められる。

四肢骨は、寛骨臼(r.)付近片、上腕骨(r.)遠位部片 2 点、頭蓋骨小片が検出されている。

### 第 11 層

C の一部と  $P_2 \cdot P_3$  の歯槽部の残る下顎骨 (r.) が検出されている。四肢骨は、寛骨臼 (l.) 付近片、脛骨 (r.) 前縁片、頭蓋骨小片が検出されている。

## 2. ウミガメ類

ウミガメ類の遺存骨が、各層より検出されているが量的には第 5 層が他を圧倒する。

### 第 5 層

ウミガメ類の遺存骨の殆どは、腹甲各種板の破片である。そのうちの多くは肋骨板で、他に上・中・下腹甲板も認められる。全体の遺存骨量(約 2270 g)からすると、1 頭分のウミガメ類の残存骨であろう。第 6 層より、アカウミガメかと思われる下顎骨が出土しており、おそらく同種のものであろう。

### 第 6 層

肋骨板小片 3、下顎骨 1 が検出されているのだけである。下顎骨はアカウミガメに

類似する。

### 第9層

肋骨板小片1、指骨の小片1が検出されているのみである。

以上のように、第5層を中心に遺存骨が検出されているが、残存骨量よりすればきわめて少い頭数しか推定できない。

以上のように、貝類・魚類を除く動物遺存体は、イノシシ・ウミガメに限られ、他に小片であるが、海棲哺乳類の遺存骨らしいものが若干認められるにとどまる。

## II. 出土貝類一覧表 (表3)

当遺跡から出土した貝類は多量で、種類も同定できたものだけで36科109種と多岐にわたる。以下の表3は、その同定結果と各層における有無を一覧表にしたものである。

## III. 出土貝類と民俗 (表4)

手広地区周辺における貝類の呼称・捕獲法・調理方法を一覧表にしたものが表4である。項目で取り上げられている貝は、遺跡出土のもの他に、現在近辺の海で採取できるものを含んでいる。

なお、魚骨についても同定一覧表を掲載する予定であったが、鑑定の折合いがつかず今回は見送ることとした。

## IV. C<sup>14</sup>測定結果 (47頁)

各層にわたり、比較的良質な試料(木炭粒)が得られたので、年代測定を日本アイソトープ協会に依頼した。報告書をそのまま掲載したが、左肩に層の対照表をつけておいた。各数値とも今後の研究の重要な参考資料になり得るものである。

表1 イノシシ遺存骨数量表 (II146・V6などは遺物整理番号を表わす)

	Cr.	Mand.	Scap.		Hum.		Rad.		Ul.		Pelv.		Fem.		Tib.		Fib.		cal.		推定個体数	
			r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	下顎骨	四肢骨
第3層		個体a 個体b			I 1																2	1
第5層	II146	個体c	II118	II146	II141	II 9	II 3	II13	II147		II130	II122			II146	II120						
		d	II136	II146	II146		II10				II146											
		e	II143				II156														5	3
		f g																				
第6層	III21	個体h		III13 III19				III14													1	2
第11層	V 5	個体i							V 4						V 6						1	1
合計		9	3	0	3	2	2	1	3	1	2	1	0	0	2	2	0	0	1	1		



表2 イノシシ歯牙残存歯式表

個体	Mand. (R.)											Mand. (L.)										
	M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>2</sub>	C	I <sub>3</sub>	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	I <sub>3</sub>	C	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>		
第3層	a	M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	+		C		I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>		I <sub>2</sub>	+	+			P <sub>4</sub>	+	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>		
	b		M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>			C								+		P <sub>4</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	(M <sub>3</sub> )		
第5層	c																m <sub>2</sub>	m <sub>3</sub>	M <sub>1</sub>	+		
		d	(M <sub>3</sub> )	M <sub>2</sub>	+		P <sub>3</sub>	C	+	+	+	+	+	C	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	(M <sub>3</sub> )		
第6層	e	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>	+			+															
		f	(+)	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	+												+	+	(M <sub>2</sub> )	(M <sub>3</sub> )	
第11層	g																			M <sub>2</sub>	(M <sub>3</sub> )	
		h					P <sub>3</sub>	C														
第11層	i													+	+	+						

(註) + 齒槽部残存  
 (( )) 骨体内完全埋没  
 ( ) 骨体内部分埋没

表3 出土貝類一覽表(1)

綱	科	種	各遺物包含層に於ける出土の有無											
			3	5	6	9	11	13	14					
腹足綱	ミミガイ科	<i>Haliotis varia</i>	○	○	○									
		ツタノハガイ科	○	○	○									
	ユキノカサ科	<i>Penepatella vidua</i>	○	○	○									
		<i>Collisella langfordi</i>	○											
		<i>Pattelloida saccharina</i>					○							
		<i>Collisella luchuana</i>									○			
		<i>Patelloida striata</i>										○		
		<i>Tectus pyramis</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Tectus maximus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Tectus niloticus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Trochus sandwichensis</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Turbo argyrostoma</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	リユウテン科	<i>Lunatia marmorata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Astrarium haematragum</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Nerita albicilla</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Nerita polita</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Ritena helicinoidea</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Vittina paralella</i>											○	
		<i>Cerithiopsisilla cingulata</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Cerithium nodulosum</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Cerithium kobelti</i>											○	
		<i>Contumax citrimus</i>											○	
	スイショウガイ科	<i>Strombus isabella</i>								○				
		<i>Conomurex luchuans</i>	○										○	
		<i>Harbago chiragra</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Lambis lambis</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Euprotomus vomer</i>	○											
		<i>Mohetaria annulus</i>			○								○	
		<i>Ravitrona caputserpentis</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Peribolus mauritiana</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Peribolus arabica</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Cypraea tigris</i>											○	
	フジツガイ科	不明	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Charohia tritonis</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		<i>Ranularia pyrum</i>	○											
		<i>Septa hepatica</i>		○										
		<i>Turrituriton kiiensis</i>											○	
		<i>Bursa tuberosissima</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

表3 出土貝類一覽表(2)

綱	科	種	各遺物包含層に於ける出土の有無											
			3	5	6	9	11	13	14					
腹足綱	オキニシ科	<i>Colubrellina granularis</i>		○			○							
		<i>Tutufo lissostoma</i>						○					○	
	ヤツシロガイ科	<i>Tonna perdis</i>		○										
		<i>Tonna chinensis</i>			○									
		<i>Murex trivremis</i>		○	○									
		<i>Menathais tuberosa</i>							○					
	アツキガイ科	<i>Mancinella armigera</i>											○	○
		<i>Drupa albolabris</i>		○										
		<i>Parpura distinguenda</i>		○	○					○				○
		<i>Parpura armigera</i>		○	○	○				○			○	○
		<i>Parpura panama</i>		○	○	○				○			○	○
		<i>Parpura persica</i>		○	○	○	○			○			○	○
		<i>Nassarius zonalis</i>												○
		<i>Fusinus perplex</i>		○										
		<i>Fusinus perplexus minor</i>												○
		<i>Fusinus crassiplicatus</i>		○										
	イトマキボラ科	<i>Fusinus nigrirostratus</i>		○										
		<i>Latirulus craticulatus</i>												○
		<i>Pleuroploca trapezium</i>		○	○	○				○			○	○
		<i>Pleuroploca trapezium audouinii</i>		○	○	○				○			○	○
<i>Pollia undosa</i>													○	
<i>Vasum ceramicus</i>			○	○	○									
<i>Vasum turbinellus</i>			○	○	○								○	
<i>Harpa major</i>													○	
エゾババ科	<i>Oliva miniacea porpyritica</i>		○											
	<i>Mitra stictica</i>												○	
オニコアコシ科	<i>Lithoconus tessellatus</i>		○											
	<i>Virroconus ebraes</i>		○	○								○	○	
ショクコウラ科	<i>Virroconus sponsalis</i>												○	
	<i>Virroconus fulgetram</i>		○							○				
	<i>Cleobula quercina</i>		○											
	<i>Pionoconus magas</i>		○											
フヂガイ科	<i>Rhizoconus miles</i>		○									○		
	<i>Comus litteratus</i>		○	○	○									
	<i>Dendroconus striatus</i>		○											
	<i>Chelyconus boeticus</i>		○										○	
	<i>Leptoconus generalis</i>		○											
	<i>Darioconus tessellatus</i>		○											

表3 出土貝類一覽表(3)

綱	科	種	各遺物包含層に於ける出土の有無											
			3	5	6	9	11	13	14					
腹足綱	イモガイ科	<i>Textilia bullata</i>												
		<i>Rhizoconus troginus</i>												
		<i>Gastridium geographus</i>		○	○									
		不明	○	○	○									
	ナツメガイ科	<i>Bulla vernicosa</i>		○										
		<i>Cyclophorus turgidus</i>										○		
		不明	○	○	○									
		<i>Barbatia decussata</i>	○	○	○									
		<i>Barbatia bicolorata</i>	○	○	○									
		<i>Trisidos semitorata</i>	○											
イガイ科	<i>Modiolus agripeta</i>	○												
	<i>Modiolus nipponicus</i>				○									
	<i>Comptopallium radula</i>												○	
	<i>Spondylus barbatus</i>	○	○	○										
	<i>Ostrea gigas</i>	○	○	○										
	<i>Saxostrea echinata</i>				○									
	<i>Chama reflexa</i>	○	○										○	
	<i>Chama brasicata</i>													○
	<i>Vasticardium alternatum</i>	○	○											
	<i>Codakia tigrina</i>	○												○
シヤコガイ科	<i>Tridacna elongata</i>	○	○	○										
	<i>Tridacna crocea</i>	○	○	○										
	<i>Tridacna gigas</i>	○	○	○										
	<i>Periglypta reticulata</i>	○	○	○										
	<i>Meretrix lyrata</i>	○	○	○										
	<i>Tapes litera</i>	○												
	<i>Gafrarium pectinatum</i>	○	○	○										
	<i>Katelysia hianina</i>													○
	<i>Dosinia japonica</i>		○											○
	<i>Venus foveolata</i>		○	○										○
マルダレガイ科	<i>Pitar sulfureum</i>				○									
	<i>Pitar indecoroides</i>		○	○										
	<i>Psammotaea elongata</i>		○											
	<i>Asaphis dichotoma</i>	○	○	○										
	<i>Scutarcopagia scodinata</i>		○	○										
	<i>Akediconcha kawamurai</i>													
														○

表4 手広地区周辺における貝類の呼称・捕獲法・調理方法

科・種	手広地区における呼称	住用村における呼称	棲息地	捕獲方法	調理方法	採れる時期	その他
ミミガイ科 ミアナゴウ <i>Ovinotis ovina</i>	ヌズリインニヤ	トコブシ	波の荒い海、珊瑚礁に棲む	満潮時に、リーフから出て来たところを捕獲	ゆでて食べる	夏場	上等な貝である
ニシキウズ科 ベニシリダカ <i>Tectus maximas</i>	タツチヨンニヤ ※「立ち貝」の意		リーフ内	素手	ゆでて食べる	夏場	
リュウウテン科 チヨウセンサザエ <i>Turbo argyrostomum</i>	カタンニヤ	タマミナ	水深1m前後のやや深い地点。珊瑚礁の終わる地点	干潮時に岩の間から素手で捕獲	つぼやき・刺身	一年中	リーフに多く棲息している
リュウウテ科 ヤコウガイ <i>Lunatia marmorata</i>	ヤッコウケ		比較的深い場所(水深2m以上)	潜水して捕獲	身が多く、生で刺身にしたり、ゆでた後食べたりする	春～秋	殻を使用した時は身に糸をつけて2～3日木の上につるしておく
タカラガイ科 ハチジョウダカラ ホシダカラなど <i>Perilobis mauritiana</i> <i>Cypraea tigris</i>	大型のもの ワシニヤ (白) サシニヤ (色付) 小型のもの ムクンニヤ	ウシ	リーフ内	素手	ゆでた後、後背部を打ち欠いて身を出す。打ち欠く時は2個の貝を用いて背部を打ちする	一年中	錘として利用することもある
フジツガイ科 ホラガイ <i>Charonia tritonis</i>	ブラ ※ホラガイを吹く音に由来	ブラ	砂中	素手	ゆでて食べる。 身は少々にか味があまり、あまり好まれない	一年中	殻を使用することが多い
ヤツシロガイ科 スクミウズラ <i>Tonna cepa</i>	アブランニヤ		リーフ内	素手	ゆでて食べる	比較的少ない	
シラクモガイ科 Parpara <i>Parpara armigera</i>	カブ ※トゲの多い貝(オニコフシ、ツツレイシ、テツレイシ等)の総称		リーフ内	素手又はドライバースタの掘りおこす	ゆでて食べる	一年中	
イトマキボラ科 リュウキウツノマタ <i>Litinus polygonus</i>	スンニヤ		リーフ内	素手	ゆでて食べる	夏に比較的多い	
イモガイ科 イモガイ科の貝	ブットウンニヤ	ブットン	浅瀬	素手	塩でゆでる	春～秋	あまり好んでは食べられない
イタボガキ科 カキ類	ガキ	ガキ					あまり食べない
シヤココガイ科 シラナミ <i>Tridacna elongata</i>	ギブ ※シヤココ貝類を総称している場合もある	スワリ ※「ス」は瀬や珊瑚礁を示す語	岩の底に付着	アッサリグイと呼ばれる鉄棒を貝の外唇部にさしこみ、こじめる	刺身(身が柔らかい)ゆでると固くなるので煮て食べられることはない	一年中	
イソシジミ科 ヤエヤマスタレ <i>Katelysia hiantina</i>		ムギ	内海の淡水と海水の混じる場所				
イソシジミ科 マスオガイ <i>Psammotaea elongata</i>		カキミナ	内海の砂中	干潮時にドライバースタのものを入れ、貝がそれぞれを食べる間に周りから穴を掘って捕る	ゆでて食べる	春	
イソシジミ科 リュウキウマオ <i>Asaphis dichotoma</i>		クチボト			ゆでて食べる		
シシジミガイ科 シレナシジミ <i>Geloina papua</i>			淡水と海水が混じる場所		ゆでて食べる		
ツオノハ科 オオベッコウガサ <i>Cellana testudinaria</i>	ナブ ※「ナブ」は蓋貝の意	コシナ ※「コ」はユル、即ち夜を示す	岩場	ドライバースタのものとする	ゆでてたべる みそに入れて食べることもある	春～秋	
スイシヨウガイ科 マガキガイ <i>Conomurex luchuuanus</i>	ドピンニヤ		浅瀬の岩場	素手	ハリ状のもので身をとりだし、ゆでて食べる	春～夏	
スイシヨウガイ科 クモガイ <i>Lambis lambis</i> スアイシガイ <i>Harpago chiragra</i> サソリガイ <i>Lambis crocata</i>	ウミンニヤ 又はマヤンニヤ ※「猫貝」の意 スアイシガイのことをマヤンニヤと呼ぶこともある				煮た後、殻をわけて身をとりだす。生では食べない	冬	突起が7本のものは縁起がよいとして家屋の軒下に下げて魔除けにする風習がある
小型の2枚貝	マラツ	ウムギ			汁物のだし		
フジツボ	チヂフガ ※「チヂ」は頂上、「フガ」は穴を意味する	チヂブッカ	岩場	ドライバースタのもの	汁物のだし		あまり好まれない

編者註

依頼者コードにある「手広第○層」は本論の層序と次のように対応する。

手広第1層-第3層 手広第5層-第11層  
 手広第2層-第5層 手広第6層-第13層  
 手広第3層-第6層 手広第7層-第14層  
 手広第4層-第9層

年測 第 KN-60014号  
 昭和 60年10月25日

社団法人 日本アイソトープ協会

東京都文京区本駒込二丁目28番45号  
 電話 東京 03 (946) 7 1 1 1



## 測定結果報告書

昭和 59年 10月19 日に受取りましたC-14試料 9 個の測定結果ができましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-4949	手広第1層	1590 ± 60yB.P. (1540 ± 60yB.P.)
N-4950	手広第2層	2860 ± 90yB.P. (2780 ± 85yB.P.)
N-4951	手広第3層	2770 ± 80yB.P. (2690 ± 80yB.P.)
N-4952	手広第4層	2680 ± 60yB.P. (2610 ± 60yB.P.)
N-4953	手広第5層	3280 ± 90yB.P. (3190 ± 90yB.P.)
N-4954	手広第6層	3550 ± 75yB.P. (3440 ± 70yB.P.)
N-4955	手広第7層	3990 ± 85yB.P. (3880 ± 85yB.P.)
N-4956	手広粘土層	3790 ± 120yB.P. (3680 ± 115yB.P.)
N-4957	サモト第2層	3160 ± 65yB.P. (3070 ± 65yB.P.)

年代は <sup>14</sup>C の半減期 5730 年 (カッコ内は Libby の値 5568 年) にもとづいて計算され、西暦 1950 年よりさかのぼる年数 (years B.P.) として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C 年代がこの範囲に含まれる確率は約 70% です。この範囲を 2 倍に拡げますと確率は約 95% となります。なお <sup>14</sup>C 年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。(御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。)

この測定結果についてコメントがございましたら、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

測定	研修課	
	課長	担当者